新潮日本古典集成

謡曲集

中

伊藤正義 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第七三回）
謡曲集 中

昭和六十一年三月一日　印刷
昭和六十一年三月五日　発行

校注者　伊藤正義
発行者　佐藤亮一
印刷所　大日本印刷株式会社
発行所　株式会社新潮社
〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
電話　東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替　東京　四―八〇八

装画　佐多芳郎
組版　シーティエス大日本
製本　加藤製本株式会社

定価二五〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Masayoshi Itō, Printed in Japan, 1986.

ISBN4-10-620373-1 C0392

目次

凡例……五
清経……一五
鞍馬天狗……二七
呉服……三九
源氏供養……五一
項羽……六一
皇帝……七一
西行桜……七九

桜川……九一
実盛……一〇五
志賀……一一九
自然居士……一二九
春栄……一四三
俊寛……一五九
猩々……一六九
角田川……一七五
誓願寺……一八九
善界……二〇一
関寺小町……二一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

殺生石……二二五
千手重衡……二三九
卒都婆小町……二五一
大会……二六一
当麻……二六九
高砂……二八一
忠度……二九三
龍田……三〇七
玉鬘……三一九
田村……三二九
定家……三四一

天鼓……三五三
東岸居士……三六五
道成寺……三七三
道明寺……三八五
融……三九七
朝長……四一一
各曲解題……四二七
付録
能楽諸流一覧……五〇三
能面一覧……五〇四
装束一覧……五〇六
小道具・作り物一覧……五〇八

凡　例

本書は、おおよそ次の方針に基づいて通読と鑑賞の便宜を図った。

〈謡曲本文について〉

一、底本は光悦謡本の特製本（鴻山文庫本）に拠り、上製本（同上）を対校して補正した。欠脱等、底本の不備を他本で補った場合もある。光悦本の概略と、底本採用の理由については上巻の解説に示した。

一、光悦本に独自な本文のうち、明らかな誤りについては諸本で補正した場合もある。底本を補正した場合や、独自のかたちを存した場合には、その旨を頭注に示した。

一、本文の表記は必ずしも底本のままとせず、以下に記す原則に従って改めた。

一、漢字は原則として新字体を用いたが、一部は旧字体をも併用した。また、底本の漢字表記を改めた結果が本文の意味に関わる場合には、その旨を頭注に示した。

一、仮名遣いは原則として歴史的仮名遣いに統一した。但し、「あう」「なう」等の間投詞は「おう」「のう」に統一したほか、「報う」「栄ふ」「しほる」等、慣用・特例による場合もある。

一、送り仮名は最大限に送ることを原則とした。

一、掛詞、もしくは音通の縁語・序詞等の同音異義の修辞語は、本文を仮名書きで示し、右傍括弧中

に、文脈の順に漢字を宛てた。同音異義語の一方が仮名書きで通用する語の場合は、文脈上の順序を示す並列点を置くだけで示した場合もある。

（例）　しらくもの（知らず・白雲）　柴の戸をさすが（鎖す・）思へば

一、仮名書きにした同音異義語で、その仮名遣いが異なる場合は、下文に続く語の仮名遣いを優先させた。但し、謡曲の発音を勘案して、この原則に拠らぬ場合もある。

（例）　波のあはぢがた（泡・ウ淡路潟）　いふべの（言・ウタ）山

一、掛詞を含む句が繰り返される場合、下句には下接の漢字を宛てることを原則とした。

（例）　あまの（海士・天野）の里に帰らん　天野の里に帰らん

一、本文には句読点を用いず、以下に記す原則に従って、字間のアキで示した。

一、本文の韻文部は音数律で句を分かち、句切れは一字分のアキで示した。なお、曲節上の分離句（分離のトリ・オクリなど）は四分の一の字アキで示した。

一、音数律のない散文部は、底本の句切りに基づき、一字分のアキで示した。底本に指示のない場合でも、現行観世流の句切りを参考にした場合もある。

一、一小段が二節以上に分かれる場合は、その部分を二字分のアキで示した。また、小段中の役の交替は二字分のアキを原則としたが、行の末尾では誤解のない範囲で適宜処理した場合もある。

一、曲名の表記は現行観世流に従い、それと異なる底本題簽（だいせん）の表記は各曲解題に示した。底本に不備

のある場合は他本を参照した。

〈間狂言本文について〉

一、間狂言は、謡曲底本に示されたもののほか、左記の江戸期版本を以て補った。間狂言が独立して読まれた当時の享受資料として用いたが、上演台本ではない点を留意されたい（上巻解説参照）。

一、語リアイ・シャベリアイ本文は、古活字本「間の本」（鴻山文庫本）の他、寛永九年版本（鴻山文庫本・東京芸術大学本）、寛永無刊記本（鴻山文庫本等）の順に拠り、またアシライアイについては、貞享三年刊『間仕舞付』、元禄十年刊『能仕舞手引』（以上架蔵本）に拠った。右に未収の曲は本文の掲出を省略して概略を示すに止めた。それぞれの底本は各曲の扉裏備考欄に示した。

一、右の間狂言本文（ワキ等の詞を含む場合もある）は謡曲本文より小さい活字を用いて区別した。

一、間狂言本文の校訂は謡曲本文の場合に準じたが、掛詞等の傍記は省略した。また、読み方が確定できない場合は底本表記のままとし、振仮名を省略した。

〈振仮名について〉

一、振仮名は現行観世流の謡い方に基づいて発音式表記を片仮名で示し、ジ・ヂ・ズ・ヅはジ・ズに、ヰ・ヲ・クヮ・クヮンはイ・オ・カ・カンに統一した。なお、歴史的見地から、他流をも参考にして発音を改めた個所もある。頭注にその旨を示した。

一、本文が平仮名書きの場合でも、発音上の特徴を示すために適宜振仮名を施した。但し、他記事との関係で省略した場合も多い。他例を以て類推されたい。なお、促音・拗音は、印刷上の制約から

表記を区別しなかった。

（例）　生身（ショオジンノ）を　　今日（コンニツタ）は

一、音読語の内破音（「含」）は平仮名「つ」で示した。

（例）　即身成仏（ソクシンジョオブツ）

一、本文中に頻出する「仕（ツカマツ）る・承（ウケタマワ）る・奉（タテマツ）る・候（ソオロオ）」は振仮名を省略した。但し「候（ソオロオ）」の場合は振仮名を施した。

〈小段名・役名・曲節型について〉

一、本文は上巻解説に示すところに従って小段に分かち、各小段の冒頭にその名称を〔名ノリ〕等の形で示した。また、舞事等の名称は【序ノ舞】等の形で示した。

一、段構成は、頭注欄にセピア刷りアラビア数字で示した。

一、役名表示はおおむね底本に拠りつつ、「シテ」「ワキ」（「ワキツレ」は「ワキ連」と表示）等の形に統一した。但し、登場人物が多い場合は「立衆」「オモアイ（能力）」等の表示を用いた場合もある。

一、底本は「地」（地謡）と「同」（同音）を区別して示すが、本書では「地」に統一した（上巻解説参照）。底本に記された役名は各曲の扉裏備考欄に示した。

一、底本の役名表示が著しく不完全、もしくは明らかな誤りや通常に異なる場合、諸本を検討して補正した。底本に独自な場合を含めて、その旨を頭注に示した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一、曲節型・吟型は現行観世流に基づき、左の記号で示した。

吟型＼曲節型	詞	拍不合	拍合	大ノリ
弱吟	「	へ	∽	∽
強吟	「	∽	∽	∽

（なお強・弱交りの吟型については主たる吟型に括弧を付して示した）

〈演出注について〉

一、謡曲本文の理解を助けることを目的として、能として演じられる場合の舞台上の動きをセピア刷りで傍記した。

一、演出注はいわゆる型付の併記ではなく、また舞台上の動きのすべてを記さない。例えば、登場後の〔次第〕は後向きに鏡板に向って謡うのが定型であるが、そのことをふまえて「常座に立ち」と記し、地謡による「地取り」を記さない。舞事の前の定型の所作なども特記しない。

一、演出注の中には、謡曲底本が省略した小段の補足をも含めた。また、囃子事を【名ノリ笛】等の形で示した。

一、所作は現行観世流に基づき、そのうちの基本的と判断されるところを示した。非上演曲については、類曲や古型付類を参考して推定を加えた。

一、所作は本文に対応させることを原則としたが、他記事との関係や印刷面の諸制約から、その原則にはずれたり、割愛を余儀なくするところも少なくない。

一、所作を示す主語は、本文と対応する個所では省略した。また、地謡部におけるシテの所作につい

ては、誤解のない限り主語を省略した。

一、所作を示す用語は、型付の術語をできるだけ避け、おおむね左記の表現で統一した。

扇を高く上げる（上ゲ扇）、扇をはね掲げる（ユウケン）、扇をはねる（ハネ扇）、扇を高く掲げる（雲ノ扇）、扇で招く（招キ扇）、謡に合せて舞う・謡に合せて動く（左右・サシコミ・ヒラキ等の定型の所作や、謡の文意を表わす所作）、舞台を大きく回る（角トリ左回リ）、小さく回る（右回リ）、等。

〈頭注について〉

一、頭注は注番号（漢数字）で本文該当部分と連結したが、その前後に関連する場合も多い。

一、本文の口語訳は〈　〉中に示し、語釈も口語訳中に含めた場合が多い。韻文部の口語訳は、連続的文脈を配慮して適当なまとまりで示した。

一、口語訳を示した部分での諸事項は、口語訳の後に一括して記し、各個の注番号を施さない。

一、出典注記のうち、書名は略称に従った場合が多い。また和歌作者の「読人しらず」は記載を省略し、『和漢朗詠集』所収句の作者名は、「白楽天」以外を省略した。出典以外に、和歌・連歌表現の類型（『連珠合璧集』等）や、参考資料としての引用も多いが、所収叢書名等を省略し、また、未翻刻資料は所蔵を示すことを原則としたが、省略に従った場合もある。

一、謡曲の直接の典拠で長文にわたる場合は各曲解題に示した。

一、本文の異同についての注記は、底本に関する前掲諸項目以外は、特に重要と認める場合に限った。室町期上掛り写本は「古写本」、室町期下掛り写本は「金春古写本」等と略称したが、必ずしも古

写本間に共通することを条件としたわけではない。「五流」もしくは「宝生（流）」「喜多（流）」等と示した場合は現行の本文を指す。

一、謡曲の曲名は《葵上》等の形で示した。

〈各曲前付について〉

一、各曲の扉裏に、登場人物の役名とその扮装を示した。扮装は現行観世流における最も基本的な形を略記した。着用の面の名称は太字で示した。なお、本巻付録にその一覧を掲げた。

一、同じく扉裏に、一曲の構成（日本古典文学大系『謡曲集』前付に準拠）と梗概を、本文の段構成と対応させて示した。

一、また備考として、曲柄（「観世流謡曲名寄」による）、太鼓の有無、現行五流所演の有無、作り物、謡曲底本の指定役名、および間狂言底本等を示した。

〈解説について〉

一、解説は、上巻において、謡曲本文の変遷、及び版本間狂言を概観し、謡曲詞章の特質を小段構造との関連で略述し、凡例の補足とした。

〈各曲解題について〉

一、各曲の解題は巻末に一括し、その内容は次の通り番号で区分して示した。

㈠ 作者・成立・曲名・初見等に関すること。

(二) 出典・主題等に関すること。
(三) 補説・演出・間狂言等に関すること。
(四) 作品研究に関する主要参考文献。

〈付録について〉

一、本巻の付録として、(一)能楽諸流一覧 (二)能面一覧 (三)装束一覧 (四)小道具・作り物一覧 を添え、前付、及び各曲解題の参考とした。

本書の底本関係については、鴻山文庫・故江島伊兵衛氏の御高配に預り、同文庫現蔵の法政大学能楽研究所よりも種々の御便宜を賜った。東京芸術大学図書館の御厚意とともに厚く感謝申し上げる。本書が先行の諸注釈書や諸論考より多大の学恩を蒙っていることは言うまでもないが、特に横道萬里雄・表章氏の『謡曲集』上下（岩波書店刊「日本古典文学大系」）からは、小段理論をはじめ、その成果に多面的な示教と準拠を得たほか、小山弘志・佐藤喜久雄・佐藤健一郎氏『謡曲集』(1)(2)（小学館刊「日本古典文学全集」）にも負うところが多い。なお、本巻についても味方健・西野春雄・黒田彰・阿部泰郎の諸氏からは直接種々の御教示を得た。校正でも樹下文隆君をはじめ多くの人々の援助を受けた。記して厚く御礼申し上げる。

謡曲集

中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c